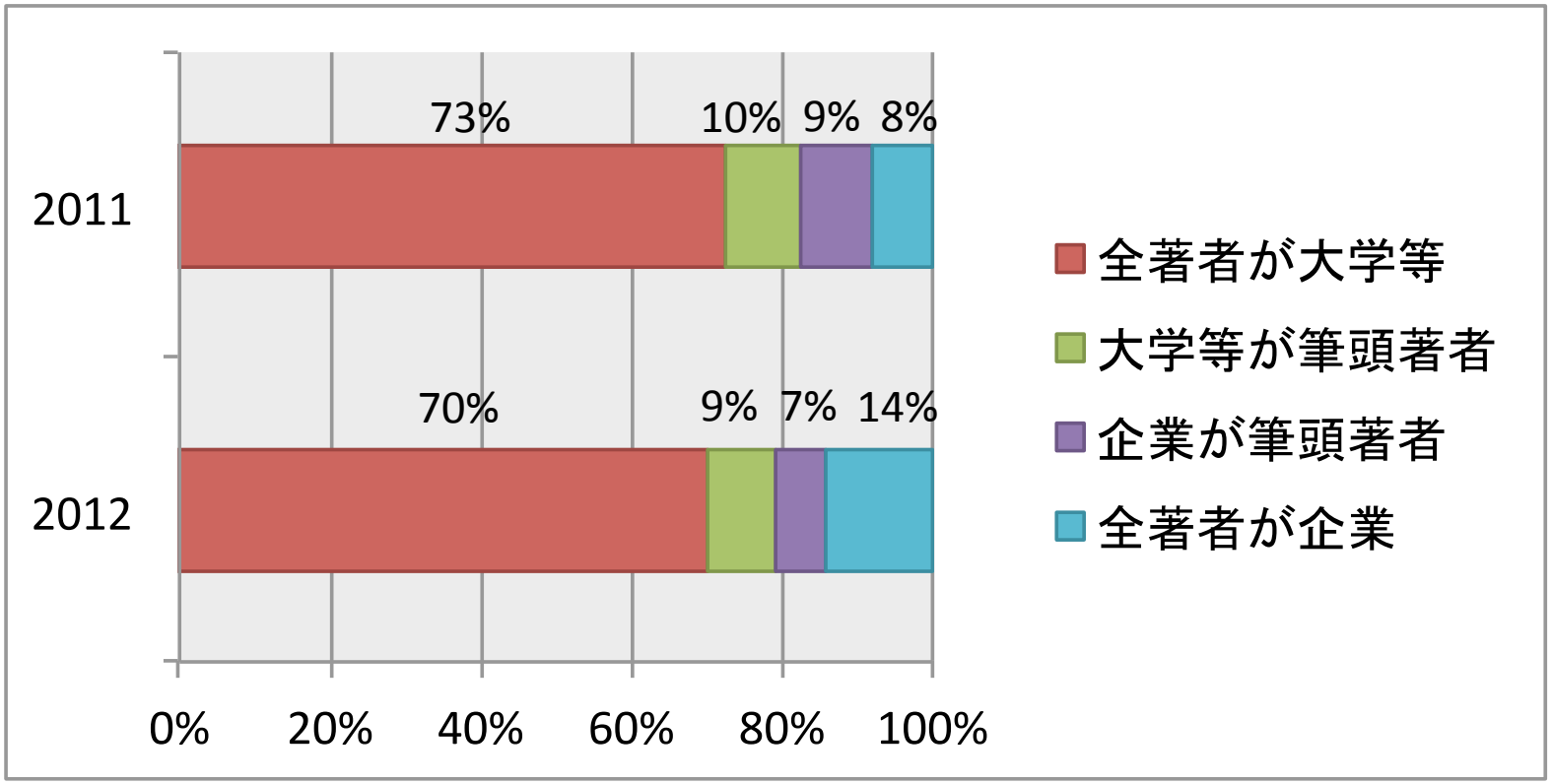
企業からの投稿について

基盤グループ主査
中村大賀 (日本IBM)

企業からの論文はまだまだ少ない

- 過去2年間の論文誌ジャーナル掲載論文
  - 情報学広場から独自に集計したもの



企業から論文を出すメリット

- 現実の問題におけるデータを用いることで有益な成果を発表できる可能性がある
- 企業としても個人としても成果が認知される
- 企業内外の協業の成果を残すことができる

企業からの論文が少ない要因

- 投稿数自体が少ない
  - そもそも論文を書くことが推奨されていない (会社や所属部署に大きく依存)

- 投稿しても不採録になる
  - 書き方に問題がある (企業に限らない課題)
  - 企業からの論文に顕著な課題

編集委員が論文を落とす理由 (昨年のパネルより)

- 新規性が無い
  - 落とすには，既存研究を示す必要がある
    「簡単なことだから誰か既にやってるはずだ」
    では落とせない
- 条件付採録の条件を満たしていない
- 内容が不明確
  - 条件付採録にしたいけど，条件を明確にできない
    修正の結果によって採否が変わる条件はダメ
    (「有用性を示してください」という条件にはできない)

企業からの論文に顕著な課題

- 新規性・有用性の示し方の誤解
  - 「○○をやってみたらうまくいった・役に立った」は、実践事例や業界論文としては有効でも学術論文としては通らない
  - 「不明確」「論文の体裁をなしていない」と言われる典型的なパターン
- 「再現性」のための情報公開の限界
  - 生データや詳細の公開が困難なことが多い
  - 社内規則等で公開データの使用に制限があることがある

対策

- 大学との協業をうまく活用する
  - よい論文の書き方・論文になる研究の仕方を学ぶ
  - 大学の先生は企業のデータを欲しがっていることが多く、論文を書くモチベーションも高い
  - 学生インターンシップなどを活用
- 公開できる情報をうまく切り分ける
  - データの特徴や実施条件について査読者が納得できる記述の仕方を努力・工夫する (ぼかして書くのではなく、書ける情報を詳細に書く)

ぜひ論文誌にご投稿下さい